# 『着信（ちゃくしん）めーろ』

作者　淺羽　一

人の心を読める力ってのは、あらゆる電波を受信出来る携帯電話を持ってるようなものの気がする。だとすれば大変だ。四六時中、休む間もなく鳴りっぱなしで、しかも電話だけならまだしもメールなんかだとこちらが無視をしようにも一方的に心の声が送りつけられてくる。

そんなもの、いちいち返しちゃいられない。と言うよりも、真面目に対応しようとすれば一通の文面を読んでいる最中に二通も三通も新しいメールが届いてしまう。そう言う意味では留守番電話も同じだけれど、近頃の携帯はご丁寧にも留守番電話の新着まで律儀にメールで報せてくれるのだ。

そんなもんだから、仮にその能力を捨てられないのだとすれば、解決方法なんて結局はしばしばファンタジー映画に描かれる主人公の通りにするしかないんじゃなかろうか。要するに、心を閉ざすのだ。それはさながら、パタンと折りたたみ式の携帯電話を閉じるように。或いは、携帯電話そのものの電源を切ってしまうか。

窓の外へ視線を向けると、雨はいつしか止んでいて、空はいかにも夏の夜という感じだった。控え目ながらも冷房の効いた室内ではあまり意識せずに済んでいるものの、外はさぞかし暑くて湿っぽいのだろう。とは言え、狭い男の一人部屋で何台もの携帯電話と睨めっこをしている状況に比べれば、そちらの方がまだ過ごしやすいかも知れないが。

色鮮やかなストラップやきらきらとしたクリスタル装飾を施された複数の携帯電話は、いかにも若くて華やかな女の子連中が使っているもの……っぽく見える。いや、実際そうなのだ。ただし、あくまでも仕事用として、かつ仕事中のみ、しかも名義は法人で、なんて条件は付くけれど。

と、またしても一台の携帯電話が電子音を鳴らした。いい加減に疲れてきてたって理由もありしばらく放置していると、ややあってからシルバーのラインの入った黄色い携帯は静かになった。でも、その一部はあたかもこちらを急かすように、しつこくチカチカと緑の点滅を繰り返している。

…仕方ない、と割り切れるのはあくまでも仕事だからだ。とりあえずトイレついでに冷凍庫にあるソーダ‐アイスを取ってきてから、再び憂鬱な作業に戻ろうと決めた。時刻はもうじき午後十一時。それを過ぎれば今度こそ本当に風呂へ入ろう。

黄色い携帯電話を開いて画面を見ると、メールの送り主は案の定、それなりに常連の男だった。しかしながら常連なのにも関わらずキャストの女の子自身が相手をしないのは、詰まる所、一回ごとに落としてくれる金額が少ないからに他ならない。

全くもって良く出来た話だ。まさか客の方は、自分が足繁く通って指名を繰り返し、誕生日だとか来店してくれて何回目記念日だとか今日はちょっと前髪を切りすぎて失敗しちゃったのせっかく来てくれたのに可愛くなくてごめんねだとか適当な口実や芝居を使っては酒とフルーツを注文させようとするホステスによって、実は密かにランク付けされ、それに応じたメール‐アドレスや名刺を渡され、挙げ句の果てに重要度の低い客のメールは本人でなく俺達みたいな黒服連中が管理する携帯電話へ送られているなんて、夢にも思っていないだろう。少なくとも、己がそちら側に分類されているなんて、きっと。

だって、そうじゃなかったら、この客みたいに恥ずかしげもなく〈京香（きょうか）ちゃん、愛してるよ〜〉とか〈たまにはそろそろ店の外でもデートしてよ〜〉なんて文面を絵文字たっぷりで送ってきたりしないはずだ。そして俺は、そんなメールの内容や送り主のランクを総

合的に判断した上で、個別に返信するか決めたり、或いはキャストの名前で一斉送信の宣伝メールを送るのだ。勿論、どんな時でも絵文字や顔文字はふんだんに使い、文章だって可愛らしくを心がける。インターネット上の匿名掲示板で女性を装いコメントしているネカマみたいなものだけど、これの出来次第で店の売り上げが変わったりするからあながち馬鹿にも出来やしない。

さて、どうしたもんか。

やがて全文を読み終えた俺は、水色のアイスをかじりながら頭を回らせた。客のランクとしては中の中〜中の上という程度なのだが、文章の最後にある〈来週って京香ちゃんの誕生日だよね。今度行く時にはプレゼントを持ってくから期待してて！〉が気になる所だ。

現実問題、客の方も、偽のメルアドを使われているような連中は即ち口先だけで期待外れな場合が多い。だが、その一方で、たまに真剣になっている相手もいる。ましてや、この客みたいに「京香が応えてくれそうなタイミング」を狙ってメールを送ってくる人間ならば尚更に。

理解しているのだ、相手の出勤日や、また平均して自らへメールが送られて来やすい時間帯を。例えば、キャストからのメールが届く瞬間はつまりその彼女が携帯電話を触っている瞬間であるはずなのだから—あくまでも建前上は。

徐々にアイスの量が減り、代わりに木の味が混ざってくる。そこで少しでも楽しみを長引かせたくて、サトウキビをかじるように薄い板を噛む。染み出してくる汁気の甘さは、いかにも水色っぽい感じがした。

結局、俺は返信することなく携帯電話を閉じた。下手にメールを返せばそのまましつこく口説き文句を並べてきそうだったからだ。確実な上客ならまだしも、今夜はもう気分的に閉店だ。とは言え、完全に無視するのも勿体なさそうなので、また明日、出勤前にでも当たり障りのないメールを送ることにしよう。京香へ伝えるのも、この程度のネタでは今からメールを転送するより改めて口頭での方が良いだろう。一応、毎週の火・水・金・土曜日が彼女の出勤日で、今日は木曜日。そして俺の出勤日は月・水・金・土と日曜日。彼女に会えるのは、変更が無ければ週に三日。

京香は現在、二十人ほどが在籍する店の中で上からおよそ四番手くらいに位置するホステスだ。当然ながら本名は別にあるし、二十一歳という設定になっているが実年齢は俺と同じく四捨五入すればもう三十。その上、客受けの良いロングの黒髪は仕事中のみのカツラだったりする。いやはや、恐ろしい話だ。でも、それよりも遙かに驚きなのは、すでに五歳になる子持ちということだろう。離婚歴は無いが、それは単に結婚歴が無いからに過ぎない。基本的に同伴もアフターもしない彼女が店内で客をあしらっている間、娘はそのビルの上階にあるキャスト用の託児所で過ごしている。俺もたまに世話をするが、大人しいながらも人見知りせず、なるほど彼女の娘だなという子供だった。あの子を気にせずに同伴やアフターを重ねれば、もしかしたらナンバー1にだってなれるかも知れないが、そうしようとしない彼女の気持ちはおそらく自然なものなんだろう。

まぁ、何もこれは京香に限った話じゃない。皆、それはキャストにしても彼女らを支える黒服にしても、それぞれが何かしら理由や背景を持っている。成人までの割の良いアルバイトとして働くのもその一つだし、昼は学校で夜にしか働く時間を取れないからと睡眠時間を削っている子もいる。一度は足を洗っていたものの一般の会社の水が合わないから

と再び舞い戻ってくる者もいる一方で、他にやりたい仕事を始める為の資金稼ぎとして水に浸かっている黒服もいる。例えば俺のように。

思えばずいぶんと長い間この生活を送っている。

週に五日の出勤日、残りの二日は休みと言いつつも、実際はキャストのフォローや店外の雑用に追われて丸一日ゆっくり出来ることなんて滅多にない。時給は確かにコンビニのバイトなんかよりも良いが、下手なミスはそのまま減給や罰金として返ってくるから気も抜けない。それでも懲りずに続けてこられたのは、詰まる所、気に入っているのだろう、職種をでなく、職場そのものを。

正直、最初の頃こそいわゆる夜の仕事をしているという意識はあった。でも、すぐに気付いた。同じなのだと。なるほど、普通の会社と比べれば働く動機は多種多様で、出勤する時間帯も違えば、着ている制服だって異なり、世間からの評価にも差がある。だけど要するに「お仕事」なのだ。

勿論、考え方は人によってそれぞれだ。けれど少なくとも、俺の目にはファスト・フード店で売られているゼロ円のスマイルも、延々と愚痴をこぼすオッサンに向けられる笑顔も、どちらも等しく眩しく映る。むしろ、偽名や年齢詐称なんて、産地偽装や賞味期限の誤魔化しに比べれば遙かに良心的じゃないか。とは言え、自分の下心を第三者に見られ、挙げ句の果てにそいつからの返信に一喜一憂している客は確かに滑稽だが、本人らが満足しているのだからそれもまた許容範囲内だろう。馬鹿にするつもりは無いけれど、同情する気もさらさら無い。さらなる発展を望みたければ、本人がそれに見合った客になれば良いだけだ。

現に、例えば京香にしても、彼女自身がメールや電話のやりとりをしている客は少なからずいる。言うまでもなく、その内容は親しくなるに連れビジネスとプライベートの境目が曖昧になっていくもので、彼女や客の方から世間話感覚で話してこない限り、こちらに中身を知ることなんて出来やしない。そこで交わされる言葉の数々が、果たして真実なのかそれとも虚飾なのか、確かめられるのは当事者のみだ。もしくは、例外的に、その当事者から真剣に相談を受けた者くらいか。ただし、仮にそうなった時はもうすでに、本人達は結構な深みにはまっている場合が多い。

疑似恋愛を本物だと客に錯覚させるのが彼女たちの仕事だが、中には自分の方こそ客に対して本気になってしまうキャストはいる。また、己自身が客としてホストクラブなどに通い詰め、まさしく「お客様」になってしまうパターンも珍しくない。そして黒服生活が長いと、身内のキャストの話を、仕事の付き合いで知り合った余所の店の人間から聞かされることも、稀にだが、ある。そしてそして、さらに奇跡的な確率で、自分が密かに心を寄せている女性が、まさしく典型的なお客様としてとあるホストに入れあげて、しかも何より残念な事に客として中の中くらいのランクとしてしか思われていない現実を知ってしまうなんてことも、あながち皆無とは言い切れないのがやや悲しい。

水商売の世界において、黒服がキャストに手を出す事は御法度だ。もしもそうなった場合、いや、それが発覚した場合、例えば俺の店では「黒服の男は仕事でなく客として彼女に接していた」と見なされ、二人が店に在籍してからこれまでの時間×指名料金が男に対して請求される。はっきり言って、まともに支払える金額じゃない。と言うか、そんな大金をさっと出せるくらいなら、そもそも最初から客として店に遊びに来れば良い話だ。

「そう言や最近、S村さんの店の女の子がうちの新人にはまってますよ」
たまたま街でキャッチ中だった友人のホストと顔を合わせ、そんな話を聞く度に、どうかそれが京香じゃなければ良いのにと、決して表情にも声にも出さずに考える。同時に、彼女は子育ても忙しいからそんな暇など無いに違いない、なんて理解者を気取った理想論を浮かべてみたりする。そしてその結果、別の子であればほっとして「サービスしてやってよ」なんて軽口を返すし、万が一にも彼女であった場合は……やはり同様に「優しくしてやってよ」なんて軽い感じを装うだろう。
「まぁ、はまってるって言っても、全然やばい感じじゃないんで、大丈夫っすよ」
…何ともはや、心強い言葉だ。「実際の来店も、週に一回あるか無いかくらいだし。メールや電話はしょっちゅうらしいっすけど」。笑いながら語るホストの態度に、ややこしくも切ない真理を見た気がした。
男性客からのメールが黒服に届き、黒服からの想いは密かにキャストへ向かい、彼女からの気持ちがホストへ注がれ、ホストの中には風俗嬢に貢いでいる者もいて―。
或いは、男性客には妻がいて彼女は彼にキャバクラ通いを止めて欲しいのかも知れないし、もしかしたら風俗嬢は働かない夫を養う為に体を売っているのかも知れない。さらに言えば、その夫からの矢印が回り回って男性客の妻へ向いている可能性だってあるだろう。
なんて、ここまで行けば想像を通り越して妄想だ。でも、厄介な事に現実ではもっと複雑で残酷な世界が形成されていたりするから質が悪い。一方通行の矢印は途中で分岐し、はたまた交差し、合流し、かと思ったら急に反転し、やがて何処がスタートで何処がゴールかも分からない迷路になる。そのくせたまに最短距離のルートを見つけたと浮き足立ったら、そこには落とし穴があったりする。リスクの先に必ず成功があるなんて優しさは、ハッピーエンドの映画に限ったお約束だ。
本当に、善くも悪くも筋書き通りにはいかないものだ。などと、とっくにふやけた木の棒を噛みながら哲学者を気取ってみても、アイスの味はもう戻らない。
と、そこで不意に電子音が鳴った。ぼんやりと視線を移せば、メタリック-ブルーの携帯電話がメールの着信を報せている。時刻はすでに午後十一時三分。此処にも新たな矢印が一つ。
俺は先端の割れた木の繊維を舌に感じつつ、さっと文面を確認した。送り主の客は新人キャストに付いているランクで言うなら中の下で、内容も三回に二回は無視して構わなさそうな世間話。要するに、対応としては明日の一斉送信でオッケー。もしくは仕事を終える区切りとしても丁度良い。
と言うことで、俺は全ての携帯の着信音をオフにした。いい加減、風呂に入りたい。立ち上がり、アイスの棒をゴミ箱へ。
一方通行でも前には進む。当初の予定金額が通帳に記載されるまで、後もう少し。果たして、そうなった時、俺はすんなりと進路を変えて別の道へと移れるのか。それとも、うだうだと理由を付けてこの生活を続けるのか。はたまた、その金で新しい矢印を買おうとするのか。
目的を忘れたわけじゃない。ただ、経過する時間に比例するように迷いや欲が増えていく。あんなにもはっきりと見えていたはずのゴールまでの道のりが迷路に変わる。
タオルと替えの下着を用意している間に、気付けば無音の携帯電話が一台、チカチカと

光を放っていた。おそらく、風呂から上がってくる頃には全ての携帯が点滅しているだろう。そんな日常に苦笑を浮かべつつ、エアコンの設定温度を一度低くした。

〈了〉